

1983年 8月25日

毎月10日、25日発行

第44号 10頁300円

定期購読料(1部22回)
手渡し3000円/開封3500円/密封4000円

赫旗

共産主義者同盟中央機関紙

東京都大田区大森北1-13-11

電話(03)766-4729 東京7-86947

編集・発行人 北沢晋

関西赤路社

大阪市福島区大開1-19-13

副島ビル 電話(06)462-7030

9.15三里塚現地へ

大地共有・自主耕作・二期阻止

秋期攻勢へ全国から起とう

九・一五三里塚闘争は、世界的激動の真只中、十七年間でわれわれにとって一番有利な時期に開かれようとしている。今こそ、三・八総会十三、二七横幅集会が切り開いた攻勢の局面を打ち固め、政府・公団の一期着工攻撃と真正面から対決していく全国陣型を作りあげよう。今こそ、三里塚を軸に個別分散している反帝反中農根勢力の結集をかちとり、中曾根政府打倒へ進撃しよう。

戦争と革命の要素の激突は、中米革命の爆発、朝鮮・アジアでの反外勢反独裁民主の頑強な闘い、欧米に於ける空前の反核戦闘争として、第三世界と帝国主義中枢部を貫いて、立ちあらわれ、火花を散らしている。明らかに、戦後世界体制は、崩壊の危機の中で、歴史的ふるいにかけられている。

七月、米帝レーガンは、中米革命鎮圧のため、キューバ危機以来最大の軍事演習「アワスターII」を急ぎよ決定し、強行した。レーガンの戦争策は止まる所がない。仮帝ミシティランのチャド内戦への介入を背後で支える、同時にマルコス政権のアキノ氏射殺を追認している。更に、レーガンは戦略一中距離核戦力の大増強、パーシングIIの欧州配備、核弾頭トマホークの極東配備等、際限のない軍拡をおこし進めている。この米帝レーガンの戦争策動は、対ソ帝国主義間戦争を闘い、生き残ったものであった。この間、われわれは、明大における党派闘争が顕在化し、以來、われわれは試練の中にはじめた。この間、われわれは、党中央議論に対する態度、党内外闘争の根本問題

の局勢変化に対する鎮静剤という意味である。

日帝中農根にとって、米帝の一定の指揮の下、日米安保のNATO化即ち、レーガン「同一化」に開かれようとしている。

今こそ、三・八総会十三、二七横幅集会が切り開いた攻勢が、危機に直面した日帝の延命の局面を打ち固め、政府・公団の一期着工攻撃と真正面から対決していく全国陣型を作りあげよう。今こそ、三里塚を軸に個別分散している反帝反中農根勢力の結集をかちとり、中曾根政府打倒へ進撃しよう。

戦争と革命の要素の激突は、中米革命の爆発、朝鮮・アジアでの反外勢反独裁民主の頑強な闘い、欧米に於ける空前の反核戦闘争として、第三世界と帝國主義中枢部を貫いて、立ちあらわれ、火花を散らしている。明らかに、戦後世界体制は、崩壊の危機の中で、歴史的ふるいにかけられている。

七月、米帝レーガンは、中米革命鎮圧のため、キューバ危機以来最大の軍事演習「アワスターII」を急ぎよ決定し、強行した。レーガンの戦争策は止まる所がない。仮帝ミシティランのチャド内戦への介入を背後で支える、同時にマルコス政権のアキノ氏射殺を追認している。更に、レーガンは戦略一中距離核戦力の大増強、パーシングIIの欧州配備、核弾頭トマホークの極東配備等、際限のない軍拡をおこし進めている。この米帝レーガンの戦争策動は、対ソ帝国主義間戦争を闘い、生き残ったものであった。この間、われわれは、明大における党派闘争が顕在化し、以来、われわれは試練の中にはじめた。この間、われわれは党中央議論に対する態度、党内外闘争の根本問題

一切の妨害許さぬ

労働者の力を！

六月、中農根の二期發誓。成田青年会議所による三万三千名の二期推進請願と成田市議会での可決。千葉議会の二期早期着工決議案、新経裁案

富の「話し合い重視」発言。このように、二期着工にむけて、政府・公団は、下からの反動的

二期推進キヤンペーンを組織する、と同時に成田用水攻撃、雑草種子散布などをを行い、反対同盟と三里塚闘争の孤立化

政府・公団は、下からの反動的

二期推進キヤンペーンを計つてある。しかし

これが、敵の弱点をつかんで、三・八・二七が切り

形態で蓄積されている。

これに対して、敵の弱点をつかんで、三・八・二七が切り

形態で蓄積されている。

これが、敵の弱点をつかんで、三・八・二七が切り

形態で蓄積されている。

党活動の刷新を

急民派主要打撃論と解党の道か、革命党の大道か

第一部 わが同盟の政治・組織総括

今党内闘争の基本的性格

はじめに

一九八一年九月、わが共産主義者同盟が創建されて早や二年が経つた。わが共産主義者同盟は、戦争と革命の激動の八十年代情勢に応え、日本階級闘争の最前線をない、これを領導し、鉄火の試練の中で、社共に代る革命的労働者党創建の大道へ、潮流をこえて大膽にすみ出す決意である。(第一回大会宣言)

こうした第一回大会宣言にしめたわれわれの出発と今日、臨大を迎えるにあたって、われわれは次のことを確認する。全同志達がこの結成宣言の基本精神の下で、全力を挙げて日本共産主義運動の分散と混迷の中間に、「赫旗」創建の大旗を押し立て、全国単一の社共に代る革命的労働者党創建・共産主義者の団結のために奮闘したことのみならず、われわれが日本共産主義運動の前進をかけて、この最前線で「闘い行動する党」として、当面する中曾根自民党政権打倒を行動環とする全人民闘争を担い、党と統一戦線形成にむけて奮闘してきた前進と八十年代の日本階級闘争における小さくとも重要な位置を闘いつけてきたことである。

そして、また、今日、わが同盟は、七十年代の統合の全成果をかけて、こうした階級闘争の中打つて出来た中で、明大問題をめぐる党内闘争が生起し、結党以来の試練の中にあることである。それ故に、臨大においてわが同盟が獲得せねばならないのは次のものである。われわれが直面している試練が、様々な表象上の、さま

(1) 統合の歴史的意義

日本共産主義運動の歴史に、「分裂から統合の時代の始まり」を画す決定的な転換点となつていて、これは、単なる統合の方法論においてではなく、綱領の下での思想的政治的統合の内実においてである——アンドの小ブル急進主義の統括、労働者階級の経済的隸属の根源を所有と労働の分離を中心とした原則の資本主義批判、労働者階級の自己解放の原則、プロの核心、共産主義と労働運動の結合の見地等を中心とする綱領的思想的立脚点、またわれわれがその前史において、「分裂から統合の時代の始まり」をしめて登場したのは、七十年代半ば以降であった。しかしこの前史においては、まだアンド世界における一つのエピソードにすぎなかった。だが、われわれが

わががまず確認せねばならないのは、わが「赫旗」統合の日本共産主義運動の歴史にしめた意義と歴史的地位である。

こうして、わが同盟の登場は、八十年代の戦争と革命の新しい時代の要請これが合致し、労働者階級の熱望してやまない単一の戦闘司令部の建設——共産主義者の団結の号砲となつたのである。

わが同盟は、統合大會直後から、綱領の獲得をもつて満足し、これを重なる「お題目」として神棚にまつるのでなく、文字通り「行動の指針」としてこれを大衆闘争の力に転化すべく奮闘してきた。

八年新年、中總大會から九月四日中總方針へと矢継ぎ

に、八十年代中期に向かう闘争方針を提案し、これをもつて「闘い行動する党」としての飛躍をかけてきた。この結果、わが同盟は、日本階級闘争における激烈なる党

派——政治勢力の再編に手をかけるに至つたのである。これ

はこれで結成されたわが同盟を綱領の統合から戦術・組織

即ち、政治方針をよりかえつてみれば、こうである。

とりわけ、全国労組連、労働者綱領問題に

おいて、われわれは、第四インター、労働者党、労働者

ループと並び、積極的推進力となってきた。そしてまた、

関西や関東における、様々な地域共闘、A合同等、中小未

ここでは、卒直にいえば、われわれが統合して日が浅いが故に、一部において綱領的團結より、旧い人間関係のそれが優先したり、旧派の不可避に抱えもつ様な「傾向」「発想」が、これら戦術・組織問題とからで慣出したことである。しかし、われわれは、このことを事実として認め、かつ否定的にみるところもあるのではないか。

なぜなら、統合の實質において、現段階が獲得した綱領を、いままで「お題目」とするのでなく、鉄火の階級闘争の中にその綱領の実践性を問い合わせ、大衆闘争の力に転化していくのである。

かくして、われわれは、このことを事実として認め、かつ否定的にみるところもあるのではないか。

そうであればこそ、第一の点は、今日問われている指導

を、まず明大問題の総括から入り、統合以降の金銭総括の中にもとらえかえきねばならない。そのことによ

り出し、その克服の基本方向をつかみ出すことである。

これは、今日の党内闘争が「赫旗」結成以来初めてのものであり、この事自身が、「試練」でありながらも、激動する情勢、掲げた任務とわが同盟の到達地平との間の矛盾を正しく解決しないでは、わが同盟の飛躍と闘いに桎梏となるような、そういう発展段階に、わが同盟二年をして至る。

この党内闘争は、昨年末8号館闘争の「敗北と撤退」以降の後局面にあつた、明大闘争において、本年四月、写

くことにおいて、今日の「分裂の危機」を社会が克服し、

党内闘争に決着をつけることである。

それゆえにこそ、わが同盟の総括を提案するにあつて、

まず、いくつかの点をほつきりさせておかねばならない。

その第一は、今日の党内闘争の基本的性格についてであ

る。

つかな事をとり去った根底に、一体わが同盟に何を問うて

いるのか、それをとり出し、共有し、その克服の方途を導

くことにおいて、今日の「分裂の危機」を社会が克服し、

党内闘争に決着をつけることである。

それゆえにこそ、わが同盟の総括を提案するにあつて、

まず、いくつかの点をほつきりさせておかねばならない。

その第一は、今日の党内闘争の基本的性格についてであ

る。

つかな事を

統合の地平を踏まえ

組織の個別争議、地域合意組織の結成、あるいは日雇全協の結成等、階級的労働組合運動の前進があつた。また「労研センター」への参加とあわせ、労働者統一戦線をも行使するところに至っている。

第三に、単一の革命的労働者党創建に向けた「共産主義者の統一協議会」提案を行い、その脊梁を推進によって賛同した部分の共同の「建黨協議会準備会議」の発足と「共同のよびかけ」を獲得した。これは、九州地方協議会(準)等の活動をはじめ全国の活動と連携しつつ、いよいよ、八三年夏(秋)に本格的な準備会議発足を迎えている。

一方で、「労働組合を握りしめ、このためにも奮闘し、大きな成果を齎し取っている。(以下略)

また、第四には、これら三つの環の前進と結びついて、社共に代る革命的労働者党創建の中核となる氣概で、「統合をうち固め、自力で局面を開く」同盟建設の四つの柱を具体化し、「闘い行動する党」への全効活動の刷新に一步大きく踏み出したことである。

党員増、全国政治新聞「赫旗」月1回刊、理論誌の発行、「女性解放通信」の創刊、各種リーフレット類の発行、全人による政治宣伝・煽動活動の拡大、工細建設方針の定着、「工場新聞」の発行、また、地区における政治共闘、労働者其闘の前進と労働者統一戦線戦術の行使、党と労働組合の結合の強化等。

これら事実は、幾度かの組織の困難をかかえもらつても、わが同盟が統合一年をして、全国党へむけた布陣と「闘い」を闘う問題の結合の強化等。

われわれは、一章においてわが同盟の到達段階と日本共産主義運動に占める位置を、二章で、こうした段階とぶつかった明大問題と、そこにはままれている中央・地方・細胞を貫く党的問題を、八二年にさかのばつて切開してきた。この作業の中で、浮び上ってきた問われた根本問題とは何か。

それは、一言でいえば、戦争と革命の風の時代の到来を前にして、いま、わが共産主義者同盟の自力の党建設の前に立ちはだかった、これまでと質と規模を異にする歴史的課題に対し、わが同盟の綱領・戦術・組織の、いかえり、されば、社会主義革命の思想・政治・組織全般にはなる「覚的武装」と「党性」を確固としたものにして、中央から細胞のすみずみまで統合し、この自力の確固き密集力や闘争力をもつて、ブルジョア独裁国家権力と対峙し、全人民武装蜂起をめざす正規の攻撃戦術を実行しなければならないということである。

明大闘争を通じて明大細胞が、またB工業での中曾根型連主にさらされた××細胞などが、この八十年代階級闘争

二、明大問題の指導総括(略)

(1) 問われた根本問題

われわれは、一章においてわが同盟の到達段階と日本共産主義運動に占める位置を、二章で、こうした段階とぶつかった明大問題と、そこにはままれている中央・地方・細胞を貫く党的問題を、八二年にさかのばつて切開してきた。この作業の中で、浮び上ってきた問われた根本問題とは何か。

それは、一言でいえば、戦争と革命の風の時代の到来を前にして、いま、わが共産主義者同盟の自力の党建設の前に立ちはだかった、これまでと質と規模を異にする歴史的

(2) 同盟の弱点と矛盾

われわれは、一章においてわが同盟の到達段階と日本共産主義運動に占める位置を、二章で、こうした段階とぶつ

かたった明大問題と、そこにはままれている中央・地方・細胞を貫く党的問題を、八二年にさかのばつて切開してきた。この作業の中で、浮び上ってきた問われた根本問題とは何か。

それは、一言でいえば、戦争と革命の風の時代の到来を前にして、いま、わが共産主義者同盟の自力の党建設の前に立ちはだかった、これまでと質と規模を異にする歴史的課題に対し、わが同盟の綱領・戦術・組織の、いかえり、されば、社会主義革命の思想・政治・組織全般にはなる「覚的武装」と「党性」を確固としたものにして、中央から細胞のすみずみまで統合し、この自力の確固き密集力や闘争力をもつて、ブルジョア独裁国家権力と対峙し、全人民武装蜂起をめざす正規の攻撃戦術を実行しなければならないということである。

明大闘争を通じて明大細胞が、またB工業での中曾根型連主にさらされた××細胞などが、この八十年代階級闘争

行動する党として、階級闘争への能をしめすことによつて、小さくとも日本階級闘争へ影響力を行使しえる政治的組織へと、一步成長したことこめしている。

(3) 到達地平と位置

こうしたわが同盟の統合の意義、かつ一年の前進は、われわれがいかなる地平に到達しつつあることをしめしている。

すなわち、「革命の主体的条件を全力で準備せよ」とを宣言葉として、八十年代初頭の階級闘争の只中で、「闘い行動する党」として自己変革を遂げつつ、全国單一の革命的労働者党創建と広大な統一戦線建設に奮闘してきたわれわれは、こう言ってよければ、かつての「革共同の綱領主義」と「ブランドの大衆運動主義への対立を共に止揚する地平」に踏みこみ、文字通り、社共に代る革命的労働者党創建の中核となる具体的一步を踏みこむ地平にたどりついたといふことである。

今日の日本階級闘争の歴史的転換期―社共の歴史的解体

崩壊を舞台に、この社共政治に対する戦闘的批判者として

あつた新左翼諸派総体が荒々しくふるいにかけられ、八十年代の階級闘争の社共に代る指導権をかけた激烈なる路

線的対立と抗争、解体と再編が日々深く規模に進行して

いる。また、労働者階級人民の深部において、大きな世代交代、一方での保守化と社共からの離反、流動、新たな革

命党と政治への志向が生まれつつ、上記の党派再編を促す

ことである。

われわれの主体的飛躍を鋭く問う問題につき当つたのである。

そのためには、必ずしも「革命の主体的条件を全力で準備せよ」とを

行動する党として、階級闘争への能をしめすことによつて、小さくとも日本階級闘争へ影響力を行使しえる政治的組織へと、一步成長したことこめしている。

① 統合以降、全労指導の要たる中央指導部とその執行

受任者としての地方委に、組織上の矛盾と弱点を集中して

こうした階級政治上の弱点を基礎として

組織上の諸問題は次の諸点である。(一部略)

これは、二中総一四中総下の書記局問題・××委員会に集中してあらわれたことにしめされた。

これは、二中総一四中総下の書記局問題・××委員会に集中してあらわれたことにしめられた。

これは、二中総一四中総下の書記局問題・××委員会に集中してあらわれたことにしめされた。

これは、二中総

(3面より)

をくりかえして弱点もある。また「一部を除いて全員が抱える個別議論においての訓練に欠けており、わが同盟の三つの環の闘争方針等、党的な総路線、重心計画と結びつけた「党的」指導の弱点をきらげ出している。」
た「党的」指導の欠如、弱さの結果として各細胞の中に現実の自然発生性への拝謁でもある急進主義的・組合主義的傾向を不斷に生み出るものとなっているといわねばならない。

(3) 次に、青年・女性労働者の組織化の弱さの問題である。
統合以降、わが同盟はこの課題をかけ、「M.L.学生同盟準」の組織化に着手し一定の成果とそしてまた「困難」にぶつかりつつ、新たに青年運動への取り組みを開始したにこどまっている。

ここには、歴史の転換期に生み出されたある清新な若々しい力をくみとる。わが同盟自らの水々しい感性と路線的吸収力、情熱への対応力とその計画性において、われわれの自力の党建設の一つの大いな弱点をみとめなければならない。

(3) 第三には、われわれの党派闘争に対する態度と諸政策の立ち遅れの問題である。

わが同盟は、第3章でのべてき様に、党と統一戦線、労働運動、全人民闘争の全領域において、これまでと異なる

地平に到達したことから、他方で帝国主義の危機そのものが階級的基礎の深部から階級分解を促し、社会をはじめどの地方委が「市場細胞建設の指導において、個々の細胞が抱える個別議論においての訓練に欠けており、わが同盟の三つの環の闘争方針等、党的な総路線、重心計画と結びつけた「党的」指導の弱点をきらげ出している。」
た「党的」指導の欠如、弱さの結果として各細胞の中に現実の自然発生性への拝謁でもある急進主義的・組合主義的傾向を不斷に生み出るものとなっているといわねばならない。

(3) 次に、青年・女性労働者の組織化の弱さの問題である。

統合以降、わが同盟はこの課題をかけ、「M.L.学生同盟準」の組織化に着手し一定の成果とそしてまた「困難」にぶつかりつつ、新たに青年運動への取り組みを開始したにこどまっている。

ここには、歴史の転換期に生み出されたある清新な若々しい力をくみとる。わが同盟自らの水々しい感性と路線的吸収力、情熱への対応力とその計画性において、われわれの自力の党建設の一つの大いな弱点をみとめなければならない。

(3) 第三には、われわれの党派闘争に対する態度と諸政策の立ち遅れの問題である。

わが同盟は、第3章でのべてき様に、党と統一戦線、労働運動、全人民闘争の全領域において、これまでと異なる

おわりに

一いつの道の闘争と党建設

こうした同盟の弱点、矛盾は、統合以降、本格的に党建設を開始して一年余という日の浅さを十分考慮せねばならない。
すなはち、結論からいえばこの同盟の党建設上のいくつかの弱点は、わが同盟の二中総一四中総方針そのものにひそむ弱点に規定されているといつてよいことである。
即ち、わが同盟は、統合全方針を骨格として、その下で、わが国の八十年代初頭から中期へ向う情勢の移行の深さ、拓がり、そのターニングポイントとしての「八三年一八五年」の攻防をつかみ、三つの環四つの柱の闘争方針を確定してきた。

これは、一言いえば、八十年代にくつきとりとめられた、戦後史上最大の数千万単位の反戦・反核闘争など内外の階級闘争の歴史的転換に応えて闘う闘争方針であった。すなはちわれわれの全人民闘争の弱点を克服し、現下の日本と自民党政府の「上からのクレーテー」、戦後國家の国家再編を要とする戦争と反戦・反核闘争などを内外的一般的任務は革命的宣伝と煽動であるといふものと対立するものではない。だが、いまこの枠内にありつつも、移行期の情勢を見据え、階級闘争の歴史的転換をふまえ、かつ、日帝打倒・米帝掃・プロ独樹立の社会主義革命のため、わが同盟の爆動を、そして労働者階級人民の闘いの先頭に立って闘い、まさにどのように小さくとも「行動の」と比較にならないわれわれの弱点、矛盾の底深さがみえる。

そこには、統合以降、われわれが全力挙げて駆けてきたたる明大問題から、党としての切開を具体的な媒介として、わが同盟全体の弱点と政治方針上の根拠にまでさかのぼってとらえかえしてきた。

が故の大いな弱点と地平がみえ、それ故にこそ、七十年代の激突とブルジョア国家権力をめぐる大金戦の真正面、つまり時代その八十年代最初の試金石となた八三

さて、われわれは、わが同盟の到達段階とそこでぶつかった明大問題から、党としての切開を具体的な媒介として、わが同盟全体の弱点と政治方針上の根拠にまでさかのぼってとらえかえしてきた。

そこには、統合以降、われわれが全力挙げて駆けてきたたる明大問題から、党としての切開を具体的な媒介として、わが同盟全体の弱点と政治方針上の根拠にまでさかのぼってとらえかえしてきた。

が故の大いな弱点と地平がみえ、それ故にこそ、七十年代の激突とブルジョア国家権力をめぐる大金戦の真正面、つまり時代その八十年代最初の試金石となた八三

さて、われわれは、わが同盟の到達段階とそこでぶつかった明大問題から、党としての切開を具体的な媒介として、わが同盟全体の弱点と政治方針上の根拠にまでさかのぼってとらえかえしてきた。

が故の大いな弱点と地

日帝打倒・米帝一掃・フ

め以外の何ものでもない。

四、國家と社会の反動再編

深まる危機を強行突破すべく、政府一支配階級は戦争準備とともに国家と社会の反動再編をおこなっている。反動再編は、今日、行政改革、労働運動と政党、天皇の元首化策動を中心とする天皇制の政治強化、刑法等の法制の改善、差別・分配支配とイデオロギーとくに教育統制および刑事弾圧の強化、下からの反動運動の組織化として展開されている。

行政改革は、国家機構および行政の強権的な合理化である。八一年三月政府は第一次臨時行政調査会を発足させた。臨調は今年三月までに五回にわたる答申を提出し、政府はこれを受け五月新「行政改革大綱」を決定した。この行革のねらいは第一に、財政赤字解消の旨の下、社会福祉費を大巾に切下げ、大衆収奪をよめ、軍拡と軍事態勢再編のための財政を保障せんとするものである。それは第二に、危機に対処する国家機構、行政政策、行政労働への一大合理化をもたらすものである。すなわち、軍事・情報・管理機関の新設・再編、地方自治体への統制強化、大企業に対する規制緩和等がそれである。行革は第三に、農業切捨て、国鉄の民営化等による業界再編の追求と、官公労を基盤とした総評労働運動の帝国主義労働運動への転化をはかるものである。

いまでもなく、今日の日本は階級支配のための機関であり、金融・独占資本のプロレタリアート・人民への支配のテコであった。したがつて行革は、かかる国家再編により、危機にある帝国主義の階級支配の反動再編をはかり、戦争準備と反動による危機の強行突破をはからんとするものである。

この行政改革には、土光先頭として財界巨頭が参加し、官僚と労働貴族とをしたがえ、一方で金融寡頭支配の裏体をあらわにし、他方で議院・致体制を準備してきた。中曾根政府は行革を「現下最大の課題」とし、明治維新、占領下の諸改革に匹敵する「第五回」を位置づけ、秋期国会を行革国會とし、正面突破をねらっている。國労に対しても、すでにマスコミをも貢献し、人民大衆との分断をはかり、「現場協議制」を切り、今五月「国鉄再建監理委員会」を設置し、民営化追求での解体攻撃を進めている。

また三重闘争に対し、パイプライン建設を強行し、八月供用開始をもくろみ、成田用水建設に着手し、二期工事に着手せんとして、闘争解体をねらっている。

政府はこの間刑法改正・保安处分新設策動を一貫しておこなう。刑事施設法・矯正施設法の成立および保安保護法改悪をねらってきた。これら法改悪は、労働者・人民の闘いを鎮圧し、被抑止大衆とりわけ女性、「障害者」への差別・分配支配を助長することに目的がある。しかし、本年三月優生保護法改正案の国会審議を政府は当面断念せざるを得なかつたように、人民の断固とした粘りづよい反対の前に、これら反動法案はいまだ成立を妨げられており。部落解放運動に対しは、狹山闘争の「同義」、「同和」が最も反映されるようないままである。これ闘争は、放運動の皇民贅化がつよまつてゐるなかで、部落労働者の主体的闘いが広がっている。

高まる労働者・人民の闘争に対し、政府は治安強化を強化してきた。弾圧は三重闘争、労働運動と革命闘争にた

て続けにかけられている。のみならず選挙活動、教育の現場へ拡大してきた。とりわけ要所に警察官僚を配置した中曾根政府の成立によつて刑事弾圧は強化され、労働運動に対する弾圧で逮捕者は四月まで昨一年間の数を上回った。

イデオロギー攻撃の強化は、防衛、憲法、天皇、教育問題等でこの間に強められた。反ソ排外主義をかき

五、中間諸党派の屈服

(一部略)

日本帝国主義の根底的な危機は、この間中間諸党派をほげしくするにかけている。八十年六月の衆参同日選舉における中間政党の大敗は、かれらの連合政権構想の現実味をいつきよに奪つた。自民党と大ブルジョアジーは、この

憲法改正をスローガンに「日本を守る国民會議」が結成され、「靖国神社公式参拝要請」「スペイ防止法制定促進」「自衛隊法改正要請」の全国の地方自治体での決議運動が推進されている。

ロギー統制の重要な手段として教科書の国家統制の強化をはかつていている。自民党は八一年大选で五年ぶりに憲法改悪を正面きてかかげ、自主憲法制定推進の宣伝を展開してきた。

また靖国神社法の成立策動にみられるように天皇制を軸としたイデオロギー攻撃が推進されている。政府はイデオ

ロギー統制の重要な手段として教科書の国家統制の強化をはかつていている。のみならず選挙活動、教育の現

場へ拡大してきた。とりわけ要所に警察官僚を配置した

中曾根政府の成立によつて刑事弾圧は強化され、労働運動に対する弾圧で逮捕者は四月まで昨一年間の数を上回った。

イデオロギー攻撃の強化は、防衛、憲法、天皇、教育問題等でこの間に強められた。反ソ排外主義をかき

て続けにかけられている。のみならず選挙活動、教育の現場へ拡大してきた。とりわけ要所に警察官僚を配置した中曾根政府の成立によつて刑事弾圧は強化され、労働運動に対する弾圧で逮捕者は四月まで昨一年間の数を上回った。

イデオロギー攻撃の強化は、防衛、憲法、天皇、教育問題等でこの間に強められた。反ソ排外主義をかき

て続けにかけられている。のみならず選挙活動、教育の現場へ拡大してきた。とりわけ要所に警察官僚を配置した中曾根政府の成立によつて刑事弾圧は強化され、労働運動に対する弾圧で逮捕者は四月まで昨一年間の数を上回った。

イデオロギー攻撃の強化は、防衛、憲法、天皇、教育問題等でこの間に強められた。反ソ排外主義をかき

六、小ブル諸党派の限界

(一部略)

日本帝國主義の根底的な危機は、この間中間諸党派をほげしくするにかけている。八十年六月の衆参同日選舉における中間政党の大敗は、かれらの連合政権構想の現実味をいつきよに奪つた。自民党と大ブルジョアジーは、この

憲法改正をスローガンに「日本を守る国民會議」が結成され、「靖国神社公式参拝要請」「スペイ防止法制定促進」「自衛隊法改正要請」の全国の地方自治体での決議運動が推進されている。

ロギー統制の重要な手段として教科書の国家統制の強化をはかつていている。自民党は八一年大选で五年ぶりに憲法改悪を正面きてかかげ、自主憲法制定推進の宣伝を展開してきた。

また靖国神社法の成立策動にみられるように天皇制を軸としたイデオロギー攻撃が推進されている。政府はイデオ

ロギー統制の重要な手段として教科書の国家統制の強化をはかつていている。のみならず選挙活動、教育の現

場へ拡大してきた。とりわけ要所に警察官僚を配置した中曾根政府の成立によつて刑事弾圧は強化され、労働運動に対する弾圧で逮捕者は四月まで昨一年間の数を上回った。

イデオロギー攻撃の強化は、防衛、憲法、天皇、教育問題等でこの間に強められた。反ソ排外主義をかき

て続けにかけられている。のみならず選挙活動、教育の現場へ拡大してきた。とりわけ要所に警察官僚を配置した中曾根政府の成立によつて刑事弾圧は強化され、労働運動に対する弾圧で逮捕者は四月まで昨一年間の数を上回った。

イデオロギー攻撃の強化は、防衛、憲法、天皇、教育問題等でこの間に強められた。反ソ排外主義をかき

て続けにかけ

光建設の機関車となろう

(7面より)

社や労働貴族からの離反と流動が大規模にすんでおり、この一方で新左翼諸派の分解と再編が進行し、大党派闘争の時代ははじまつたことにある。とりわけ今年三月、三里塚反対同盟の歴史的脱皮これに対する中核派の敵対は、小ブル共産主義の限界をあらわにすると共に、人民闘争の指導権、指導路線と組織めぐる革命左翼の主体的内実が鋭く問われたことを示すものだった。まさに、革命主義からの脱皮と共にかわる革命建設の内実が厳しく問われている。

特徴の第五は、社共の議会主義、改良主義の破綻、かれらの分解と低迷に対し、これにかわる新たな路線と組織一党と統一戦線建設への志向がつまり、具体的に模索され、重要な芽がのびつることにある。この動きは党建設をめぐっては、われわれの提起した「共産主義者の統一協議会」が「建協議会準備會議」の発足として具体化し、統一戦線をめぐつては「人民協商談話」とその内部の八派議会の形成、様々其の形成として発展

はじめている。

以上日本階級闘争の歴史的転換の開始は、しかし同時に、深い難題をもつづけている。すなわち①反戦・反核闘争における「平和と民主主義」レベルの価値観、エコロジー的価値観の革命的社会主义への転化の追求②労働組合運動の根底的な再生のための思想、路線・戦術をつくりだして、小ブル共産主義の限界をあらわにすると共に、人民闘争の指導権、指導路線と組織めぐる革命左翼の主体的内実が鋭く問われたことを示すものだった。まさに、革命主義からの脱皮と共にかわる革命建設の内実が厳しく問われている。

九、まとめ

め

いてゆく理教育、家庭、地域等全社会領域における管

理強化、イデオロギー攻撃への反撃の課題⑤共産主義運動の思想上、実践上の混迷を克服する問題等々、根底から脱皮、飛躍、解決、強化が問われる問題が山積している。こうして、日本階級闘争は帝国主義の戦争準備と反動

の根柢的な再生のための思想、路線・戦術をつくりだして、小ブル共産主義の限界をあらわにすると共に、人民闘争の指導権、指導路線と組織めぐる革命左翼の主体的内実が鋭く問われたことを示すものだった。まさに、革命主義からの脱皮と共にかわる革命建設の内実が厳しく問われている。

はじめて、戦後独立以降のわが国のブルジョア独裁国家

としての階級性格は、本質において変化はないものの、日本帝国主義の統治体制の弱点―軍事面での相対的な立ち遅れ、高度成長で肥大した官僚機構、国に統合の面における

思想上の弱さ等々を反動的手段で穴埋めし、構造上の根底

的な危機を正面突破せんとするものである。いわば一拳に、日帝の経済帝国主義から軍事帝国主義への完成を企むものである。故に「戦後国家の総決算」を掲げた中曾根政府の

任務こそ、正にこれであり、その強烈的推進に他ならない。

急民派のいうフアシズム政権規定は、この事実を直視してぬ誤ったものといわねばならない。

しかし、帝国主義の「危機管理国家構想」の名によるこれら対応は、構造上の根柢的な危機を解決えるものではない。逆にそれは、かれらの危機をより深めるものとなる。

すなわち、一部にいわれる日帝の日米安保体制からの離脱

始め、国家・社会全体の再編を強烈におこし進めている。

すなわち、かれらは第一次に、米帝に主導された形である

とはい、軍拡・安保再編により即戦態勢完成をめざし、

以上が我が国で現在進行している事態の特徴を要約しよう。

日帝は、米帝の指揮の下で対ソ戦・朝鮮侵略反革命戦争の即戦態勢づくりを怠いでいる。政府・支配階級は、この

ための八五年体制構想を提起し、「戦争遂行国家」完成を

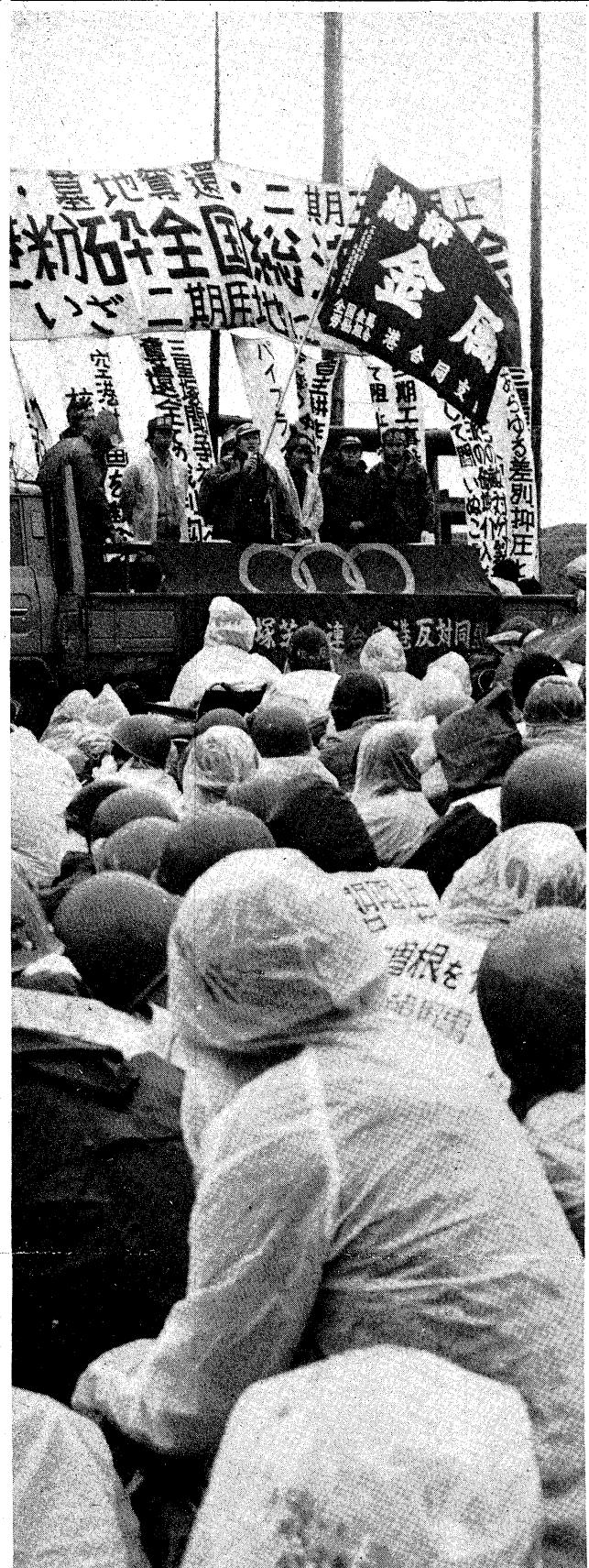
めざし、国家・社会全体の再編を強烈におこし進めている。

すなわち、かれらは第一次に、米帝に主導された形である

とはい、軍拡・安保再編により即戦態勢完成をめざし、

以上が我が国で現在進行している事態の特徴を要約しよう。

日帝は、米帝の



単なる代わりに共社

脱皮と労農連帶の新しい力と質の息吹をしめつつある三里塚闘争の前進に応えて、一坪再共有化運動等の三天大方針を握りしめ、いよいよ本格化し始めた中曾根政権による二期着工攻撃を実力阻止し、廃港への闘いを強めることである。今秋九・一五の圧倒的成功から二期実力阻止の金剛陣型形成を急がねばならない。

労働者階級を中心とする被差別・被抑圧人民の結集する全国大衆共闘機関創設のため闘う。また、われわれは、革命の大衆行動を主舞台にし、これに従属させ、当面する行動目標である「自民党政権打倒」のために、八十年代中期に至る選挙には、共同の左派候補を立てて闘うこと引き続き追求する。

② 第二の環

第二に帝國主義の戦争と反動に統合される労戦の産報化に抗し、「平和と民主主義」に代る社会主義革命路線と結合した階級的労働組合運動の創造と全国の工場・地域を革命の根據地・砦とする戦いに全力を挙げることである。

① 世界同時恐慌—日本資本主義の危機の中で、失業者の戦後史に最大の高率、また「技術革新」—ME化、口添子導入、OA等による旧来の生産、労働過程とそこにおける労働の質、労働者間の関係等の根本的变化、原発等自然の破壊などと並んで、その一部である人間そのものの破壊等に象徴される労働者大衆の労働・生活諸条件の相対的・絶対的悪化が、これまでにない新しい様相で激化している。

また、中曾根政府の行革攻撃—その最大の環たる国鉄にしめされるように、「現場協議制」の解体、あるいは、「耐乏」思想攻撃など闘う基幹部大工場・職場の解体と「企業共同体」的統合システムが組織され、他方で中小工場の闘いに対しても、B工業闘争にみる中曾根型強压!!先行的な警察権力の大量直接介入をもつて争議を早期に解体していくことまでの攻撃が吹ききかれていく。こうした現実に対する、戦後労働運動の主座を占めてきた議会主義・改良主義の社共—総評労働運動は歴史的に破滅崩壊している。これにとてかわる、こうした労働者の現実に真に応え、實際の闘いの教訓に学び、労働者階級自身が「生産の担手

④ 今日、こうした見地に立つて次のよつた闘いを重視せねばならない。増大する失業、つよまる搾取と収奪、行政攻撃、増税、M.E.-O.A化ロボット導入による合理化攻撃と闘う。とりわけ、わが同盟が重心をおべきは、日雇労協の反失業闘争の前進を重視し、反失業戦線、「失業者を金協の反失業闘争の前進を重視し、反失業戦線、「失業者を同盟」（仮称）の全国的組織化等を展望した闘い、国鉄を中心とする戦後労働運動の戦闘的支柱となつた官公労への行政攻撃を迎えう闘い、B.I.労働争の教訓から、中小・未組織争議の労働運動内の戦略的位置からして、この指導準を高め、地域共闘・下請共闘・地域合同労組・未組織の組織化の全国的な合同労組の研究交流、合同を追求する闘いである。

⑤ また、こうした工場・地域の闘いと結合して、この間の「青労寒」の突出を大切に育てつつ、現下の反戦・反革・反安保・朝鮮連帯など全人民闘争を担い、当面する「中曾根自民党政府打倒」をめざす労働組合運動の政治的発展を闘い取る。

⑥ また、重要なことは、日帝の対ソー朝鮮侵略反革命戦争準備のための労資の産報化が八年未全民労協結成、これと連動した「官公労懇」による「金吉労協」への動き等、八五年金労の統一に向つての重要な局面に対する闘いである。総評の歴史的崩壊に際して、日共一統労組懇は新たなナショナルセンター形成を歩み始め、これに対して総評左派を中心に「労研センター」が、新左翼を中心に「全労組連」が全国に形成され始め、一部合流し始めている

二、党

(1) 自力で

三、党建

(1) 自力で局面開く力を

二、党建

(1) 自力で局面開く力を

社会主義革命の物質的条件が成熟しているにもかかわらず、革命を勝利に導く主体的条件の形成が決定的に立ち遅れている。ここにこそ、今日あらゆる方面からあぶり出されているのが日本共産主義運動の致命的弱点がある。

来るべき八十年代中期以降の国家権力をめぐる二大階級の最初の会戦は、日本労働者階級の単一の戦闘司令部党とこれをテコとした広大な統一戦線などの程度まで準備し、情勢を開く鍵となる労働者階級の単一の戦闘司令部「社共に代る革命的労働者党創建のため、「共産主義者の建党協議会」の結成を推進する。

八二年一月、わが同盟は、第一回大会下「中総」「共産主義者の統一協議会」を提案した。これは約一年の後に、賛同した部分の共同した「共産主義者の建党協議会」準備予備会議発足となり、いよいよ、八三年初秋、公然と正式の

準備會議発足に結実されようとしている。
この一年有余、わが同盟は「横断的左翼論」「連合論」「共闘機関論」「統一戦線共闘論」構想と闘争しつゝ、これを「全国單一」の前衛党を建設するための機関、「日本労働者階級解放の旗印となる綱領を主張的に獲得する」(= よりかけ文) ものとして、全国の共産主義者の統合の方法と性格について、具體化してきた(中略) 過去、幾度となく共产党主義者の大統合、連合が問題となりつつも、その方法と性格・情勢・推進主体において構想段階で破産してきたことからして、この可能性と意義の巨大なるを確認できよう。

もしく、核・原発問題等、新たな社会主義と革命のための根本的な思想的創造が問われている。

故にこそ、われわれは、新左翼の内在的止揚と社共に代る新たな労働者党をめざすためには、「建章協会・共産主義者間のここにおける共同の論争と実践を通じて、こうした世界的な課題に応えうる、真に正しい路線を打ち立て、これを武装して、全国の共産主義者と労働者の団結の受皿としていかねばならない。」

このためのわが同盟自身の諸準備の立ち遅れを克服し、自力の党建設の計画と結びつけて、全党的飛躍の力で、この「建章協会」を長期に、粘り強く、全国單一の革命的労働者党的創建の土台石に育てることに奮闘する。（以下略）

わが同盟は、現下の戦争が平和か、民主主義か反動かの闘いに分け入り、社共の議会主義、小ブル平和主義、新左翼の小ブル急進主義と一線を画して闘い、労働者階級の自衛武装、大衆的實力闘争の發展を促し、中曾根自民党政府打倒闘争の爆發を組織し、社会主義をめざし、八十年代日米安保体制打碎へ――日帝打倒・米帝一掃の革命闘争の大奔流をつくり出したのである。

(2) 同盟建設の第二期へ

わが同盟の第一期建設は、先の総括の核心をつかみ、自らの脱皮と飛躍をかけて、以下の“全党的刷新”的重心と基本方向を定める。

① 思想・政治武装を

われわれがめざすのは、全世界の労働者階級と被抑圧民族の解放のため、プロレタリア国際主義にたち、労働者階級に依拠し、この自己解放の道具となる革命的労働者党である。

故にこそ、われわれは、新左翼の内在的抗議と中共に代る新たな労働者党をめざすには、「建協」を共産主義者の間にここにおける共同の論争と実践を通じて、こうした世界的課題に応えよう。真に正しい路線を打ち立て、これで武装して、全国の共産主義者と労働者の团结の受皿としていかねばならない。

このためのわが同盟自身の諸準備の立ち遅れを克服し、自力の党建設の計画と結びつけて、金党的飛躍の力で、この「建協」を長期に、粘り強く、全国單一の革命的労働者党の創建の土台石に育てることに奮闘する。(以下略)

* * *

わが同盟は、現下の戦争が平和か、民主主義か反動かの關に分け入り、中共の議会主義、小ブル平和主義、新左翼の小ブル急進主義と線を画して闘い、労働者階級の自衛武装、大衆的實力闘争の発展を促し、中曾根自民党政打倒闘争の燃発を組織し、社会主義をめさし、八十年代日米泰客体制打碎へ——日帝倒壊・米帝一掃の革命闘争の大なる奔流をつくり出すため闘つ。

